

聖書：第二サムエル記5章13～25節

説教：主に伺う

1 ダビデの信仰

1) そばめと妻をめとる

イスラエルは、王座を巡って二つのグループが争っていました。一つは、サウル家の息子を王とするべきだと考えるグループ。もう一方は、ダビデを王としようとするグループ。どちらもゆずりません。人の血が流され、人が殺されました。そんな状態が七年以上続きます。けれどもやっと人々は、神はダビデをイスラエルの王としていることに気がつきます。ダビデはイスラエルの王座に迎えられました。

今日の箇所、ダビデがたくさんのそばめや妻たちをめとったことが記されています。どう思うでしょうか。昔の日本では、天皇家や殿様は、血筋を守ることを大切にされたと言われます。というのは、子が生まれなければ一つの国が減んでしまうこともあったからです。そうならないようにと、正妻だけではなく複数の女性に子どもを産ませるということが堂々と行われていました。

ダビデの時代もこれと同じ習慣があったと言われます。ダビデもこの習慣に従って同じことをしたということなのでしょう。しかし申命記17章17節に、「多くの妻を持つてはならない」とあります。明らかに違反しています。けれども、神はそのことについては何も責めず、かえってダビデを祝福しているように見える。これはどういうことか。疑問になります。それはまた後で触れることになります。

2) 主に伺うダビデ

ダビデがイスラエルの王となったことを知ったペリシテ人は、ダビデを殺すために軍隊を送ってきました。ダビデはこれを迎え撃つために、エルサレムの要害を下っていきます。見るとペリシテ人の陣営は、すでにエルサレムのすぐそばにあるレファイムの谷に展開し終えたばかりです。そこでダビデは主に伺います。「ペリシテ人を攻めに上るべきでしょうか。彼らを私の手に渡してくださるのでしょうか。」主は、「上って行け」と答えられます。そのようにして、ダビデはペリシテ人を打ち負かしていきます。

話はこれで終わりません。ペリシテ人は、もう一度体勢を整えて軍隊を送り込んできました。そこでダビデはもう一度主に伺います。そうすると主は答えられました。「上って行くな。」一度目は「上って行け」でした。正面から戦いなさいということです。でも今度は正面ではなくペリシテ人の後ろ側に回り込んで、不意打ちしなさい。そのような作戦です。そのようにしてまたもダビデはペリシテ人を打ち負かします。

一度目と二度目の戦い。人の目で見ると、まったく同じ問題に見えるけれど、主の対処の仕方がまったく異なる。そんなことを教えてくれます。

3) 信仰深いダビデ?

さてこのことを信仰という面から見てみたいと思います。どんなときも、すべてのことについてまず主に伺うダビデすばらしい

信仰に見えます。私たちもこのような信仰者でありたいと思います。けれども実際はどうでしょうか。「この問題について、どのようにしたら良いでしょうか。神さま、教えてください。」そんなふうに祈ったとしましょう。主から声が聞こえましたか。少なくとも、私は聞こえてということはありません。おそらく皆さんもそうでしょう。はっきりと答えが聞こえたらどんなに楽だろうかと思えます。

以前、私にこんなことを語った方がおりました。「先生の言うことは、すべて神が語っていることと信じます。ですから先生の言葉に従います。」私は困ってしまいました。神の代わりに私が語っているとは到底自分で思えない。せいぜい、聖書にはこう書いていますと言えるくらいです。もし私が神の声の代弁者となれるのなら、私自身ももっと違った人生を歩んでいたことでしょう。ところが、これが失敗だらけの人生なので、とても神のことばを語っているとは思えません。

ダビデは私たちとは違い、主から特別に油を注がれた人です。特別の賜物を持っていたので主の御声を直接聴くことができたということかもしれません。では、ダビデはいつもすばらしい信仰者であったのか。主の御声をいつも聴くことができたから、間違ったことをするはずがない。そういうことでしょうか。

2 偶像

21節を糸口として考えていきます。「彼らが自分たちの偶像を置き去りにして行ったので、ダビデとその部下はそれらを運んで捨てた。」

ペリシテ人たちは、戦場にわざわざ偶像を

運んできました。今の時代、日本でもこれと似たようなことをしています。危険な作業に携わる職場、たとえば工事現場であるとか、大型トラックや船、電車を取り扱う職場など、多くのところで神棚が飾られています。なぜ神棚を飾るのか。万が一事故が起きれば、人がけがをしたり最悪の場合は死ぬ場合があります。どんなに注意しているつもりでも、人の力では防ぎきれないときがある。なので、人の力を越えた何かをお願いをする。その象徴が神棚です。

ペリシテ人たちも戦場に自分たちの信じる神を連れて来て、神の力にあやかりたいと願いました。けれども戦いに負けてしまい、いざ逃げ出すときになると、偶像を置き去りにします。誠に勝手なものです。どんな神であっても、もう少し丁寧に扱うべきではないかと思うのですが、こんなことを言うのはよけいなお節介でしょうか。

この偶像の取り扱いについて、申命記7章25節にこう命令されています。「あなたがたは彼らの神々の彫像を火で焼かなければならない。それにかぶせた銀や金を欲しがってはならない。自分のものとしてはならない。あなたがわなにかかけられないために。それは、あなたの神、主の忌み嫌われるものである。」ダビデは、ペリシテ人たちが置いていった偶像を拾い集め、捨てます。おそらく火で焼いたのだらうと思われます。ダビデはきちんと聖書のみことばに従っております。

3 主が先に立つ

1) なお罪のなかで

もう一度確認します。ダビデは戦いが起こるたびごとに、丁寧に主に伺いました。決して自分の考えを優先するようなことはあり

ません。戦いに勝った後も油断はありません。敵が残していった偶像を拾い集め、捨て去りもします。どこから見ても非の打ち所のない立派な信仰者に見えます。

本当にそうでしょうか。最初に触れた疑問を思い出してください。ダビデはミカルという正式の妻がいたのにもかかわらず、聖書の中でしてはならないと言われていたことを破り、多くのそばめと妻をめぐりました。当時のしきたりがこうであったからとか、王様はそうしなければならなかったとか、言い訳はできません。間違っていることは間違っています。

でも聖書はそのことについて何も触れず、非常に肯定的な評価しか書いていない。いったいどうしたのでしょうか。良いことをしたら、少々悪い所があっても目をつぶると言うことですか。

神はそんな方ではありません。神はきちんとダビデの罪をご覧になっています。今日の箇所をよく読むと、ダビデの罪については何も触れていないように見えながら、実はきちんと触れています。14 節にソロモンの名前があることに注意してください。ソロモンの母は誰か。バテ・シェバです。バテ・シェバはもとからダビデの奥さんであったのか。いえ、もともとはダビデの部下であったウリヤの奥さんです。それを無理矢理ダビデが奪ってしまった。あとになってからそのことがウリヤにばれるのを恐れたダビデは、ウリヤを戦場に送り合法的に殺してしまう。誰が聞いてもまったくひどい話です。

今日の箇所だけ読めば、ダビデは完璧な信仰者に見えたかもしれません。神により頼み、従順に従っているダビデでしたが、けっして完璧ではなかった。彼の中に依然として罪が

ある。

先ほど申命記7章25節のみことばを見ました。そこには、偶像は人のわなとなるものだから、絶対に捨て去りなさいと書かれていました。偶像とは、目に見える刻んだ像だけと言うではありません。人のわなとなるものすべてが偶像です。確かにダビデはペリシテ人が持って来た偶像は捨てることはできました。でも、自分の中にある偶像はどうであったか。具体的に言いましょ。ダビデは美しい女性を見てしまうと、それが人の奥さんであろうか欲望を抑えきれない。そういう弱さを持っていました。彼にとって美しい女性が偶像でした。ダビデはその偶像を捨てられないのです。

「なにごとにも主に伺っている。どんなときも主に忠実に従っている。だからすべて守られている。」とは言えないのです。ダビデを見てください。あの彼でさえ、罪を捨て去ることはできませんでした。

2) しかし罪の中から

神はどうされるのでしょうか。24節。「バルサム樹の林の上から行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上げ。そのとき、主はすでに、ペリシテ人の陣営を打つために、あなたより先に出ているから。」

神は、ダビデがその後、バテ・シェバのことで大きな罪を犯すことを知らないはずはありません。すべてを知っています。知った上で、主が戦いの先頭に立たれ、ダビデを積極的に助けていきます。

これはどういうことか。どんなにすばらしい信仰があろうとも、私たちは罪の力に勝てないということを神は知っておられます。信仰によって罪に打ち勝つと言う方が時々い

ますが、それは間違いです。絶対にできません。

だから主が必要なのです。主が先に立ってくださらなければ、私たちは罪の中で滅びるしかないのです。罪ある私たち、弱い私たち、そんな私たちを神は嫌うと思いますか。反対です。罪のある私たちだからこそ、神はなおいっそう私たちを愛し、戦いの先頭に立ってくださる。そのことをおぼえたいと願います。

皆さんの心の内にどんな偶像があるでしょうか。すべてを取り除けと言われても、それができません。偶像が自分の中にあります。そんな私たちのために、主が先に立って戦ってくださいます。神に背くようなことを繰り返す者であっても、なお神の愛は変わらずに注がれています。